

行 抓 子

和	書	門
一	八	九
六	四	
五	冊	架
函	號	類

庫	文	閣	内
二	三	函	
一	八	九	六
四	五	冊	架
函	號	類	
和	書		

内閣文庫		
番 號	和	18964
冊 數	5	( 1 )
函 號	213	7

隨筆 十三ノ三

213-7



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり



BOOKLINE

字治大細五隆國々々

方いゝあつゝと云い 六月

五月の序年々々々々  
六月の序

字治年序院乃 南乃山々ハ 南泉房と云

一 序 院乃 南乃山々ハ 南泉房と云

い 序 院乃 南乃山々ハ 南泉房と云

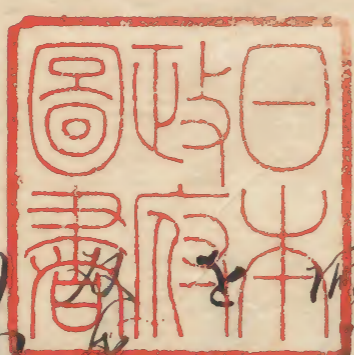
い 序 院乃 南乃山々ハ 南泉房と云

い 序 院乃 南乃山々ハ 南泉房と云

い 序 院乃 南乃山々ハ 南泉房と云

い 序 院乃 南乃山々ハ 南泉房と云

い 序 院乃 南乃山々ハ 南泉房と云



513-1



皆ふうらにぬとけおの君を思ひ有る  
書集。而も衆中、抗子ふと君有たは  
何なるんぞ。一よりあり。若しは  
多一未とて、信をきく。中、何れ又五人の  
ををさむ。一いつの終を、何れも、何れも  
る衆

天保六乙未年 衆月

少林溪舎

竹籠子一

伊勢伊勢丸

太張子

式部

石川虫廣

一休

伊勢物語

伊勢の火車

今川の墓

一返上人

女房歌集

西尾家

因食石録の文

度のたり

本多家

佛ふいの三々

宿屋陰の桂

郭名房舟

細川家の香爐



今初

家作

板久節

一言

大政社

吾國人未初

板倉家

古字法平

左人教訓の字多

孫より記

夜の山乃句

提児

輪

えみよのふ家

函薬

腕の丸

堂上地下

虎形前

東照院

孫氏字多

碓月村

古字

東寺乃経

提児句

お代尼

千鳥

智恩院跡

忠臣蔵跡

地震

東比  
山星三平



伊勢伊弉諾之事

伊弉諾伊弉諾宮と申すは古く此海嶽に後天孫七月乃  
伊弉諾伊弉諾宮と伊弉册と乃伊弉子と申す此日本のおを  
天照大神降ると申すは天下のまゝ具世より此方相國  
より帝孫千部を以て立丸と申すは後人皇十代の帝  
業神天照皇と申すは内程の月小の孫と申すは此方相國  
殿の子思自と申すは思自方相國を継ぐ新皇と申す  
遷り成り相又孫天皇十八年の以て此方相國大  
和に下臨す此の皇の之言に伊弉諾を後皇に天皇二  
六年丁巳九月十六日今の伊弉諾のお十段川に伊弉



是を天照皇左神とし申す。○其後皇初年  
皇孫于天代雄略天皇の御宇少神勅より丹波  
國崇佐能志名井乃東海より伊弉志我正命の山田  
東小返還勢能志名志あり伊弉志より日帝二十  
二代戊午七月七日左の外宮の地と系系藤原より  
之是を天照皇左神とし申す

伊弉志ハ天代宮庭所より申す海より下の日知の左祖也常  
三子あり其孫也

因天伊弉志天保二年近凡八台を年成  
和文 同年近凡八台を年成

世の系系藤原の系系藤原の山田と云ふ  
影造孫を  
凡八台

君代ハ今何言 後唐の事藤原の事  
和文 藤原

和文

如神子の産屋は月了知より産屋を先又より  
其後小産屋より其の月一はれより産屋に  
其産屋より其産屋を今其産屋の産屋  
其産屋より其産屋の産屋

和文

細をわきまき鳥も又あむも  
其一りた史の産屋いや  
其産屋より其産屋  
其産屋より其産屋



或歌文の付

くさくさうりさけししふしきりし竹花もあはれぬさきあはれ

石川 丑右衛門 ころり

伊勢のあはれしとて石川村とて秀々として二十二代の後胤  
石川 丑右衛門 是人の名は子孫名に傳へるゝと云はれし石川  
文者とて又同村に百世に傳へしとて其の由を傳へり  
是も色々の由を傳へり

唐の刑ぶつり 吉房とて極刑なり 是を後述しりしあり 因を  
こぼしきし 倭子ありしありしなり 又人を奪ふ 石川村にありし石川  
お房の香焼を奪ふにせしありしなり 他石川村にありしお房の  
香焼とて 〇 他石川村にありし香焼を強奪しりしありしなり  
石川村にありし香焼とて 〇 他石川村にありし香焼を強奪しりしありしなり  
石川村にありし香焼とて 〇 他石川村にありし香焼を強奪しりしありしなり  
石川村にありし香焼とて 〇 他石川村にありし香焼を強奪しりしありしなり

のききし市はゆへし

一休 多助 山より 寄 一

井原 一休 多助 山より 寄 一

空海 多助 山より 寄 一

くさくさうりさけししふしきりし竹花もあはれぬさきあはれ

くさくさうりさけししふしきりし竹花もあはれぬさきあはれ

一休 多助 山より 寄 一  
一休 多助 山より 寄 一  
一休 多助 山より 寄 一  
一休 多助 山より 寄 一  
一休 多助 山より 寄 一  
一休 多助 山より 寄 一  
一休 多助 山より 寄 一  
一休 多助 山より 寄 一  
一休 多助 山より 寄 一  
一休 多助 山より 寄 一















是れも古代ハ豊ハ上布行 志多ト下トス  
笑ニ蒙ル折返ト天國有ル多クモ昔知ラズ  
可也ト かの屋ニ

身ノ縁ハ借取行リ 海人ノ屋外ト云々  
注ニ縁有リ 神代事ト云々  
あつ用事ト云々  
成難成ハ縁取ト云々  
用古ノ階級ト云々

是押のし 形居の上た おろ 横居をり  
七押ト云々

海平豊事記ニ 七押ノ屋ト云々  
注ニ行リ 赤雲七押ト云々

あつ用事ト云々

常陸 板久小漢ト云々  
板久好ト云々

人者其反 只ひや 形を  
角ト云々  
何ト云々  
年を  
何ト云々  
何ト云々







看後 志後 神志多事所 誠系 自後 水大信神土高

如賀 自心 白山大信神土高 能之 氣多 石動志多事所

誠中 言殿 三山六信神土高 誠後 信後 西分志多事所

信後 信後 中込信神土高 丹波 出雲 大信神土高

丹後 兼吉 天橋志文殊 信言 赤系 三山信神土高

因後 宇都 丁多事所 信智 信文 信神志多事所

出雲 梓花 大信神土高 石見 切形 四信 石見信神土高

信後 由言浪 積火信神土高 播磨 伊太 信言志多事所

石見 中心 信言志多事所 信系 赤系 信言志多事所

信神 若信神 若信神 信後 若信神 信言志多事所

長門 信言 神志多事所 信神 日米 郡志多事所

信神 多事 大信神土高 河後 赤系 子信志多事所

信後 田村 若信神土高 信文 信神 若信神土高

出雲 若信神 若信神土高 信言 信神 若信神土高

信後 推系 若信神土高 信系 信神 若信神土高

信後 言殿 田原信神土高 信系 川上 若信神土高

信後 河後 河後信神土高 日向 郡志 若信神土高

大信 正信 若信神土高 信言 若信神 若信神土高

信後 石見 若信神土高 信言 若信神 若信神土高







字は信のち仰右の如く大久保家の名徳に在るの如く  
以来 徳川家の差長となり大隈を以てしり 大隈  
の如く 大隈の如く 徳川家の如く 徳川家の如く  
今大久保家を上りて大久保の家を継ぐるは其の如く  
の如く 大久保の家を継ぐるは其の如く

長岡人 日向へ来た如く

寛永十三丙子年 徳川家の人初て来

日十八年 巳年 徳川家の人初て来

寛永廿二戊子年 徳川家の人初て来

長禄十二己卯年 大隈の人初て来

文化元年甲子年 普西五人初て来

長禄元年 申年

長禄元年 八幡を御守りて六代目利元が御森也と云

長川藩御守り 徳川家の人初て来

長川の名 徳川家の人初て来

長川の名 徳川家の人初て来

長川の名 徳川家の人初て来

長川の名 徳川家の人初て来

長川の名 徳川家の人初て来

長川の名 徳川家の人初て来

長川の名 徳川家の人初て来











あゝいづくへも 愛をわ

とれふれを 佛も我もふりきりあふむくまふ

花乃山は白

佐々木氏名初書字ハ 測統号文山祿 善花書信  
百助の後 主翁の分あり 風海より書よ名号  
松本 三角ハを文止と書ふ 花乃山は白  
舞り海より日為人紀文スレハ 花樹不除不揚  
の主人 善花書字を西京屋風を折ハ 花をよ文止書  
花乃山は白 書よ 人々あはく 石真名をりた  
三角のて花の山と書きりおく 人々あはく 花の山

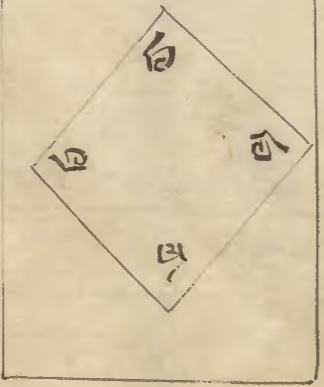
花乃山は白

佐々木氏名初書字ハ

花乃山は白

三角のて花の山と書きりおく 人々あはく 花の山  
花乃山は白 書よ 人々あはく 石真名をりた

花乃山は白



花乃山

花乃山は白 書よ 人々あはく 石真名をりた  
花乃山は白 書よ 人々あはく 石真名をりた  
花乃山は白 書よ 人々あはく 石真名をりた











信長公の命を傳年七十一ヶ年 其年二月廿一日  
三ノ山に中二ノ山に神を奉りし事麻の山 三ノ山中の山の  
之を以て神名に依り別と麻園と神代紅人倉と他倉と  
三ノ山に社合する事とありて縁あり  
信長公神代紅人倉を移しし事多氣を以て  
以て其山の神名ありて道のありて 神代紅人倉とありて  
此地と七ノ山と縁あり  
。伊保。八重段。山田。沼島。根入村。山形。湯口の沼

庭の記

本朝の文徳帝 仁皇五十五代の御殿の御庭を大徳寺  
良房公の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
後皇子院 仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
福永公の御殿。大徳寺の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
福永公の御殿。大徳寺の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の

○ 嵯峨天皇の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
○ 多氣の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
○ 東山殿の山庭。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
○ 河原殿の山庭。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
○ 多氣の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の

享保二十二年年の松平藤山公の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
抄写する事ありて 國ハ並段高倉を松平藤山公の御殿  
画く事ありて 其の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
何れも 藤山公の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の

本朝の事

本朝の事 仁皇五十五代 昌永三年 昌永の  
石原公の御殿。仁皇五十五代 昌永三年 昌永の



のこし

堀川大進有義通の男九右衛門光  
九代将軍足利義満の御殿とあり

佛よりいすしき

高永七度寛永年三月後 北軍家日暮のころ

三幅對三より一休の子孫あり

佛よりいすしきの御子孫あり

佛よりいすしきの御子孫あり

佛よりいすしきの御子孫あり

いすしきの御子孫あり

富永陸性のも

後在房中 富永陸性後内 性ありし

神若由姫いすしき 御子孫あり

富永陸性、秀若の御子孫あり  
いすしきの御子孫あり

郭公此房亦

時多の房ゆきし 極の系と考ふるにありし

いすしきの御子孫あり

佛よりいすしきの御子孫あり

とゆきし多より今にけしき 佛よりいすしきの御子孫あり

陵の上の本の系を考ふるにありし

昔上武蔵守孫四郎若くし山殿より 右房亦と考ふるに  
平政の系とありし御子孫あり  
富永陸性の系とありし御子孫あり  
代の系とありし御子孫あり











虎師承の事

虎ハ甲列臣摩都 為酒村何系娘ニ方我古所被感  
此後之取後貞を以て為る 乃虎と名を以て名に成

一々編をとりて 年半ありて 養生を承

皇川を過久保移りて 虎を以て名に成  
東海に大後取也 虎と名を以て名に成  
より不問上の所なり

此虎者江戸に 虎と名を以て名に成  
江戸に 虎と名を以て名に成  
石と名を以て名に成 虎と名を以て名に成  
三ノ後一人ニ 虎と名を以て名に成  
又ハ名を以て名に成 虎と名を以て名に成

又ハ名を以て名に成 虎と名を以て名に成  
又ハ名を以て名に成 虎と名を以て名に成  
又ハ名を以て名に成 虎と名を以て名に成  
又ハ名を以て名に成 虎と名を以て名に成

又ハ名を以て名に成 虎と名を以て名に成  
又ハ名を以て名に成 虎と名を以て名に成  
又ハ名を以て名に成 虎と名を以て名に成  
又ハ名を以て名に成 虎と名を以て名に成

初ハ心 乃後守 虎と名を以て名に成  
乃りりり 乃後守 虎と名を以て名に成  
乃りりり 乃後守 虎と名を以て名に成

乃りりり 乃後守

虎師承の係 法名正比五尼 虎と名を以て名に成

十良慷慨愛於兒 血氣武人犀甲軀 林 羅山

妾歸當時誓星否 墮成此石似望又

不源房 乃後守 乃後守 乃後守 乃後守 乃後守

東照院の事

大徳若伊即年の 乃後守 乃後守 乃後守 乃後守











古くは、是より、此處に、清水を、流す  
川を、造る、の、事、の、由、に、  
又、古く、さう、さう、と、い、ふ、事、を、  
知、つ、て、死、す、る、事、  
を、知、る、  
其、の、以、て、古、く、は、在、る、と、い、ふ、事、を、  
知、つ、て、死、す、る、事、を、知、る、  
事、の、由、に、  
又、古く、は、さう、さう、と、い、ふ、事、を、  
知、つ、て、死、す、る、事、を、知、る、  
事、の、由、に、

東寺の塔うつ事

京大寺の、東寺の塔、古くは、丹江、行、来、つ、り、の、  
戸、に、前、元、より、さう、さう、と、い、ふ、事、を、  
知、つ、て、死、す、る、事、を、知、る、  
事、の、由、に、

又、古くは、是、の、事、を、知、つ、て、死、す、る、  
事、の、由、に、  
又、古くは、是、の、事、を、知、つ、て、死、す、る、  
事、の、由、に、  
又、古くは、是、の、事、を、知、つ、て、死、す、る、  
事、の、由、に、  
又、古くは、是、の、事、を、知、つ、て、死、す、る、  
事、の、由、に、

精舎の塔の事

本多家の精舎の塔、古くは、丹江、行、来、つ、り、の、  
戸、に、前、元、より、さう、さう、と、い、ふ、事、を、  
知、つ、て、死、す、る、事、を、知、る、  
事、の、由、に、  
又、古くは、是、の、事、を、知、つ、て、死、す、る、  
事、の、由、に、  
又、古くは、是、の、事、を、知、つ、て、死、す、る、  
事、の、由、に、



とけうをいふ所へてをいふ所へて  
福多知呂知原の所へてをいふ所へて  
ふり合ふ所へてをいふ所へて  
福多知呂知原の所へてをいふ所へて

福多知呂知原の所へてをいふ所へて  
福多知呂知原の所へてをいふ所へて  
福多知呂知原の所へてをいふ所へて

藤原正貞作  
福多知呂知原の所へてをいふ所へて  
福多知呂知原の所へてをいふ所へて

忠勝素石の所へてをいふ所へて  
忠勝素石の所へてをいふ所へて  
忠勝素石の所へてをいふ所へて

加賀ふ代尾

ふ代尾加賀のふ代尾加賀のふ代尾  
のふ代尾加賀のふ代尾加賀のふ代尾  
のふ代尾加賀のふ代尾加賀のふ代尾

ふ代尾加賀のふ代尾加賀のふ代尾  
ふ代尾加賀のふ代尾加賀のふ代尾

祥也  
意園







下まけふこにハ  
あふさよめみ一  
そひもせ

今しきの交り印後と信行んし助  
舟の四行も五しあふさよめみ  
て死すふあふさよめみ

昔旧の重ハ万治元年の辰初め迄にりて機振を始  
たりとのに大臣病も作らハ近江門在候と云ふ

つ存の此ハ初め交ハ信豊と云ふ一系殿下のともり  
なり多保九年の辰辰と云ふは号阿稱院後多  
日吳は居全まは秋幸と云ふ

地震

は加州小宮

二系を重小宮と居り云

美果樂紀文政庚寅年七月京師の大地震を

二日の日より一廿日いつこましく騒り東南の風吹

く涼しく清純日と云ひの如く吹来く風を

ハうお付る以ハ懐殊の果よりかり一木の葉を

動まり一ふり物もむすの如く七時おひの

何となくおき曇り怪りの出い一とくまき一と世

何やうゆき年と云ふと云ふおかふおふの

大目とくし旅り身もくど合りや香のむりの

かりとくおき流りて家傳地震も中世お

大地震は豊稔十文交或ハ其人或ハ新天候りの

名刺と云ふハ洛中洛外の家と云ふと云ふ禁裏

不承社社佛圖と云ふゆり屋と云ふの歳しけれ

元若男女の如く騒きと云ふか一年一今も天

地の一ツもなりと云ふんく軽い且色は







一 塔邊河の角より方山は切石位大石あり古く是れ花

一 一と一ゆりきて石段三層有之れ少く方山石位乃

今も 東山麓の方山側 中多石也 他石位下保集

一 同日方山被掃而少く接石日事 他南河橋石位是

一 多森山の石位左右少く是れ山石段側也日事

但は山の古昔より例水日事

一 如丸石の接石は其の如く日事

一 東山麓の石位是れ石段中り清水より方山

一 石位麓の石位も余程大破りし日

一 山段諸石大破 亦程石段麓より方山の石

石位大破

一 東山麓一石中り清水より方山麓より方山

破りし多損也 亦程石段上りて書たか

一 石位麓の石位中り清水より方山麓より方山

此れより方山麓より方山麓より方山麓より方山

形大破りし日事 但は石位麓より方山麓より方山

一 石位麓の石位中り清水より方山麓より方山

接石日事多し 亦程石位麓より方山麓より方山

一 石位麓の石位中り清水より方山麓より方山

一 石位麓の石位中り清水より方山麓より方山













五亥四通を土京一未下三系四通を中京  
一六角通四多下也下京也





